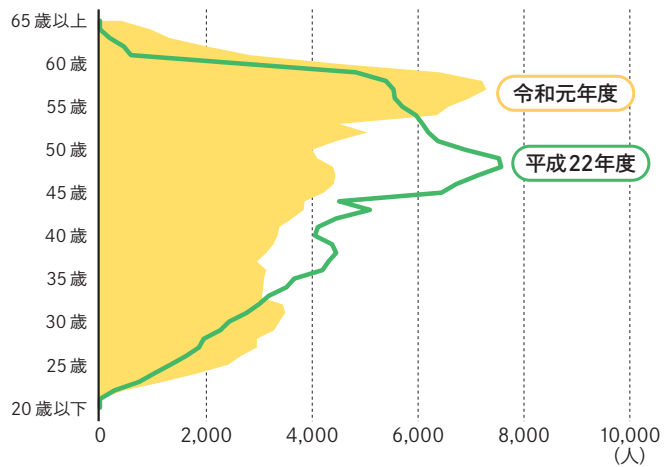


高校教師の 置かれている状況と 仕事のやりがい・悩み

日々の教育活動の中で、生徒一人ひとりの成長に寄り添い、寄与できることは、教師という仕事の大きなやりがいだ。しかし、その成果はすぐに表れるとは限らない。また、各教科の専門性が高く、教師の年齢構成が二極化している高校現場では、安心・安全な職場環境や同僚性の面で問題を抱えている。ここでは、現場の声も踏まえながら、高校教師が生き生きと働き続けるために考えるべき課題を整理する。

図1 公立高校教師の年齢構成



※文部科学省「令和元年度学校教員統計調査」を基に編集部で作成。

おける働き方改革の推進は待ったなしの状況にある。

そうした、従来とは大きく異なる状況下では、これまでの経験や各教師が個人の方だけで対応するのには限界がある。年齢や立場などの違いを超えて、教師同士が力を合わせて新しい教育環境に向き合っていくことが求められていると言えよう。

しかしながら、現在の高校現場は教員年齢の高齢化を迎えており(図1)、ベテランの教師が一気に退職する時代が迫っている。加えて、ベテランの教師の数に比べ、ミドル層の教師の数が少なく、指導技術や学校文化の円滑な継承の面で課題を抱えている。ミドル層の教師には、若手にとって相談しやすい身近な存在であるとともに、若手とベテランをつなぐ役割が期待されるが、そのミドル層の教師の数が十分ではないことで、校内の教師間のコミュニケーションに支障が出たり、若手の視点を生かした学校運営が難しくなったりするなどの懸念もある。

実際、教師間の人間関係に悩み

大きく変化する学校現場で、同僚との関係に悩む教師

AIなどの先端技術をあらゆる産業や社会生活に取り入れるSociety 5.0の到来、新型コロナウイルスの感染拡大など、近年の社会の状況やあり方は劇的に変化している。

先行きが不透明で、未来を予測することがますます困難な時代に

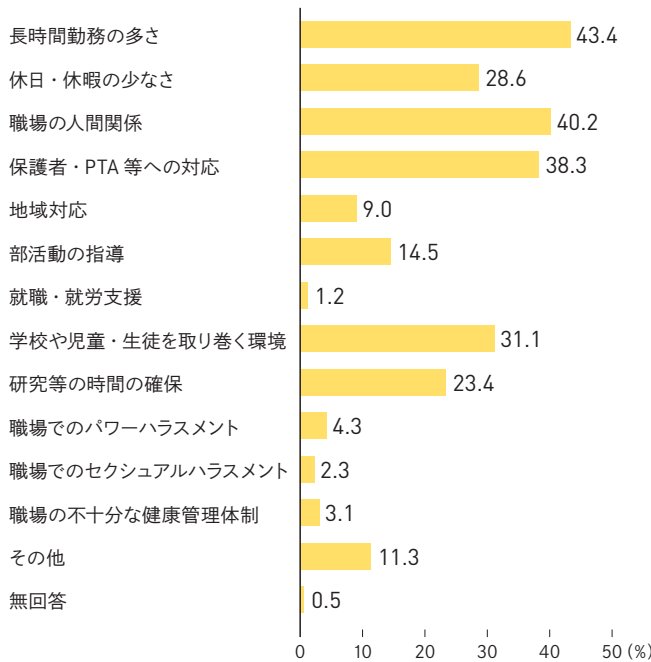
においても、様々な人とかかわりながら、自らの人生を切り拓く力を生徒に育むために、高校において

も、新しい時代に必要となる資質・能力の育成を目指した新学習指導要領が、2022年度から年次進行でスタートしている。また、新学習指導要領の実施にあたっては、「学校と社会が教育目標を共有し、連携・協働しながら資質・能力を育む、社会に開かれた教

育課程の実現」が、そして、GIGAスクール構想の前倒しによる「1人1台端末」の活用が求められている。

生徒を取り巻く環境が変化し、学校という場のあり方も変わる中で、新たな授業づくりに向けた取り組みなどが現場の教師には求められているが、その一方で、教師の業務負担の増大と長時間勤務が喫緊の課題となっており、各校に

図2 業務に関連したストレスや悩みの内容(教職員調査)



※厚生労働省「平成 30 年版過労死等防止対策白書」を基に編集部で作成。
 ※複数回答のため、内訳の合計が 100% を超える。

図3 高校教師の仕事のやりがいと悩み

高校教師が仕事のやりがいを感じる時

- 授業が、自分に必要な資質・能力を身につける重要な価値がある時間だと、生徒が実感していることを確認できた時。
- 授業中下を向いていた生徒が、むくっと顔を上げて興味津津な様子で授業を聞く瞬間。
- 試行錯誤しながら人生設計をしている生徒に伴走できていると感じた時。
- 何度も面談を繰り返し、様々な対策を練った上で、学校推薦型選抜や総合型選抜に申し、合格した時。一般選抜で、得意科目などを勘案して、生徒と一緒に練りに練った受験プランが功を奏した時。

高校教師の仕事の悩み

- ひと昔前に比べて、教師間のコミュニケーションが少なくなってきた。
- これまでのやり方に固執する同僚との関係性に困難を感じる時がある。年齢の上下関係も相まって、新しい教育のあり方に挑戦しようとする若手の姿勢を委縮させてしまっている。
- 業務内容が増加している中で、教師間の仕事量の均等化が十分に図られていない点や、一部の教師のみが学校改革に深く関与している状況が強まっている。
- 校内業務の ICT化、そしてコロナ禍により、意思疎通を図る頻度や程度が後退し、互いの本音が見えにくくなっている。
- 生徒にとってプラスになる可能性がある教育活動でも、教師間で十分な議論ができず、実現しあげられないことがある。

出典/『VIEW next』高校版読者モニターへのアンケート結果(アンケートは、2022年4~5月にウェブとファクスで実施。回答数は69)

を抱えている教師は多く(図2)、『VIEW next』高校版の読者モニターに「仕事における悩み」を聞いたところ、「ひと昔前に比べて、教師間のコミュニケーションが少なくなってきた」「意思疎通を図る頻度や程度が後退し、互いの本音が見えにくくなっている」などといった、教師間の人間関係に関する悩みを挙げた教師が最も多かった(図3)。

生徒の変化を見取るには、教師同士のつながりが不可欠

教師という仕事のやりがいとは、いつの時代においても大きなものであることに変わりはない。『VIEW next』高校版の読者モニターの声からも、教科指導や進路指導を通して生徒の成長に寄り添う喜びがひしひしと伝わってくる(図3)。

わわわわと見える生徒の成長や変化は、一朝一夕に表れるものではない。生徒は、教師の粘り強い働きかけに對して、ゆっくと、時にはらせん状に成長し、また、変化のきつかけも、生徒一人ひとりで異なるため、教師は生徒をつぶさに、そして、時間をかけて見取っていくことが求められる。だからこそ、一人ひとりの教師が孤立することなく、教師同士がつながりながら生徒に向き合うことが重要

になるが、そうした状態の実現を、新型コロナウイルスの感染拡大が難しくさせてしまっている。そこで本特集ではまず、社会環境の変化や多様な教育課題に向き合いながらも、やりがいを感じ、生き生きと働き続ける教師の姿を4事例紹介し、教師同士がつながりながら生徒に向き合うことができようになる要因を探っていく。